

物語フィンランドの歴史

石野裕子著 290ページ



220781231 西田壮汰

目的

現在に至るまでのフィンランドの歴史を知る。

幸福度世界一位になるまでの過程が書かれている。

フィンランドとは

静寂な自然と先進的な社会制度が交錯する北欧の国

多くの湖や森が広がり、オーロラの舞う天空が広がる一方で、教育や福祉制度、科学技術の進歩が人々の暮らしを支えている



フィンランドとは

北欧に位置し、西はスウェーデン、北はノルウェー、東はロシアと国境を接している。

南部はバルト海に面しており、多くの島々を抱える地形となっている。

全体的に平坦な地形が広がり、その大部分は森林と湖が占めている。



フィンランドには187,888の湖が存在し
「千の湖の国」とも称されている

フィンランドとは

人口は550万人と少なめ

首都：ヘルシンキ（国の政治、経済、文化の中心地となっている）

ヘルシンキの街並みは古典的な建築と現代的なデザインが融合し、美術館やギャラリーが点在するアートな街。



フィンランド人の起源（序章）

フィンランド人は、ボルガ川流域から移住してきたフィン人と、スヴェーア人やサーミ人との混血

フィン人はウラル系の言語を話す遊牧民で、1世紀頃にバルト海南岸に定住した

スヴェーア人はノルマン系の航海民で、400年代頃にフィンランド沿岸に入植した

サーミ人はトナカイの放牧補猟を行う北部の先住民

フィンランド人の起源（序章）²

フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語である。

スウェーデン語は少数の地域で話され、全人口の約5%が母語としている。

英語も広く理解され、特に若い世代では流暢に話す人が多い。

スウェーデン王国の辺境（第1章）

フィンランドの地域は古代から人々が生活しており、その中には独特の文化と信仰を持つフィン人が含まれていた。

しかし、12世紀になるとスウェーデンがこの地域を征服し、キリスト教をもたらした。

これにより、フィンランドはスウェーデン王国の一部となり、その影響下で中世を過ごすこととなる。

ロシア帝国下の「大公国」 (第2章)

1809年からのロシア統治時代、フィンランドは「大公国」として一定の自治を保護され、一世紀もの時間をかけて独立への基盤を築いていく

ロシア帝国下の「大公国」²

大公国時代のフィンランドには外交、軍事に関する決定権はなく

ロシア帝国の政治情勢によって統治政策が変わり、自治が制限される



ロシア帝国下の「大公国」³

1809年にはスウェーデンとロシアとの間で戦争が勃発し、フィンランドはロシア帝国の一部となった。

しかし、フィンランド人は自治を維持し、文化と言語を保護し続けた。

ロシア帝国下の「大公国」⁴

そして、19世紀にはフィンランド国民のアイデンティティと民族主義が高まった

1917年にはロシア革命の混乱を利用して、フィンランドはロシアからの独立を宣言した



揺れる独立国家フィンランド（第3章）

独立後、フィンランドでは内戦と政治的混乱に見舞われるようになる。

内戦の火種は、19世紀末のロシア化政策に対して資本家と労働者の対応の違いにあった



揺れる独立国家フィンランド₂

フィンランドの内戦にはドイツ人、ロシア人、スウェーデン人といった外国勢力も加わった

また第一次世界大戦末期という状況が重なり、様々な思惑が絡み合う戦いとなった



二度の対ソ連戦争（第4章）

1930年九月にドイツのポーランド侵攻から始まった第二次世界大戦でフィンランドは二度にわたってソ連と戦火を交えた

（最初の戦い「冬戦争」、二度目の戦い「継続戦争」）

フィンランドはソ連と戦争する意思はなく、独立を維持するためにやむを得ず戦ったと解釈

二度の対ソ連戦争₂

しかし！

現在では二度目の対ソ戦争時（継続戦争）では
フィンランドに領土拡張の意図があったことが明
らかになった



継続戦争の背景

依然としてソ連の圧力を受けていたフィンランドは、ドイツへの協力に傾き、1941年6月、独ソ戦が開始されると同時にソ連との戦争再開に踏み切った。結果的にこれはフィンランドが枢軸国側につくこととなり、連合国側から敵視されることになる。

継続戦争の背景₂

カレリア戦線ではソ連軍が大規模な砲撃と爆撃機による大攻勢を展開、

フィンランド軍は何とか踏みとどまったが、44年9月にドイツ側から離脱することを条件に和平が成立し、ふたたび領土の割譲と賠償金をソ連に対して認めた。

6万5千の戦死者を出した

苦境下の「中立国」という選択（第5章）

フィンランドは二度にわたる戦争で大きな痛手を負ったものの、独立は維持することが出来た。

1944年9月19日にソ連およびイギリスと休戦条約を締結したフィンランドは、敗戦国として復興に向かって歩みだす。

休戦条約の代償は大きかった。



苦境下の「中立国」という選択₂

休戦条約の内容について

- 1、1940年のソ連との国境線の画定およびペツァモの割譲
- 2、ポルツカラへのソ連海軍基地設置の容認
- 3 ソ連に対して6億米ドルに相当する賠償金の支払い

苦境下の「中立国」という選択³

4、反ソ・反共組織の解散

5、フィンランド軍の大幅な削減

6、ドイツ軍のフィンランド領内からの追放

西ヨーロッパへの「接近」 （第6章）

冷戦が終結し、1991年にソ連が崩壊したことで世界は大きく変動した

ソ連と適度な距離を保とうと、外交に苦慮していたフィンランドも大きな変化を迫られる



西ヨーロッパへの「接近」²

1991年12月にソ連が崩壊

フィンランドはソ連とFCMA条約を締結していたが、締結国自体が消滅した。

→後継国ともいえるロシア連邦との新たな協定締結のための交渉がはじまる

西ヨーロッパへの「接近」³

1992年1月、ロシア連邦と友好条約を締結

この条約はFCMA条約とほぼ変わらない内容であったが、軍事条項がない点が大きな違い

西ヨーロッパへの「接近」⁴

1995年1月1日、フィンランドはEUに正式加盟を果たした。

フィンランドはロシアとEUとの架け橋となることでEU内でのプレゼンスを高め、さらにロシアを孤立させないことで自国の安全保障につなげようとした



21世紀、フィンランドという価値（終章）

フィンランドは80年代後半に高成長を実現し、福祉が拡充するとともに、低い失業率とも相まって北欧型福祉国家の仲間入りを果たした。

EUにおいてフィンランドは国際協調面で重要な役割を果たし、貿易額や投資額を増やしてきた。しかし、国内的には歳出削減、福祉給付の抑制、農業や産業の不振に陥っている。

21世紀、フィンランドという価値（終章）²

フィンランドでは日本と同様に少子高齢化に直面している。

2015年、25～44歳までのフィンランド人の10人に1人が外国にツールを持つという統計結果が出されている。（少数移民社会）

21世紀、フィンランドという価値（終章）³

フィンランドは高水準の福祉の影で重税の側面が強調されることもあったが、相対的に肯定的な評価が多い。

また、フィンランドは幸福度が非常に高く、四年連続で世界一位である。

21世紀、フィンランドという価値（終章）⁴

幸福度が高い理由

- 世界で最も整ったワークライフバランス
- 充実した社会保障
- 高い教育水準
- 政治における多様性

政治・経済

フィンランドは議会制民主主義を採用しており、国家元首は大統領、行政の長は首相である。日本では選挙に出馬するため60万円の供託金が必要だが、フィンランドでは供託金は不要で、誰でも立候補しやすい環境となっている。

経済面では先進的な福祉国家であり、高い生活水準を維持している。（情報通信技術、電子産業、林業、金属産業、機械・輸送機器産業）

まとめ

フィンランドはスウェーデン、ロシアといった大国に支配された歴史を経て、独立を果たした。

また、困難な現実に向かい、豊かな社会を築いていった。

このような歴史を踏まえると、フィンランドという「価値」は遠く離れた日本からも見出すことが出来て、フィンランドを取り巻く情勢は日々変化し続けている。

